コロナ下の「あいさつの教育」を立案するワークショップ

――「学校の新しい生活様式」の観点から学校を核とした地域づくりを目指して――

島　田　博　司

Workshop for Generating the Greeting Education Plan Aimed to Create a Community Centered School from the Viewpoint of "a New Way of School Life" in order to Coexist with COVID-19

SHIMADA Hiroshi

Abstract : This paper reports on the workshop for generating the greeting education plan aimed to create a community centered school from the viewpoint of "a new way of school life" in order to coexist with COVID-19. This workshop was held in the University of Shimane for university students who want to get a high school teacher's license. The purpose of this paper is to clarify how the workshop was conducted and what ideas came out as a result.

There were three types of plans proposed by students. The first is to build "AI with monitor" equipped with a temperature measurement function. The monitor is designed to show people in the community to get acquainted and talk. The second is to develop a "Greeting App" for smartphones to match users with each other. Both of the above two proposals focus on modern technology, and are approaches that were not found in conventional greeting education. The third is a plan that focuses on revitalizing the greeting movement for high school students. Particularly in order to attract high school students who are in need of relearning the greeting skills, collaborative activities with elementary school students are planned with the keyword "together with elementary school students." This proposal is of interest to people who are interested in relationships.

Key Words : greeting education, workshop, COVID-19, new way of school life

要旨：本論の目的は，コロナ下で「学校の新しい生活様式」が求められるなか，学校を核とした地域づくりを目指す「あいさつの教育」をどうしていったらいいのか，そのプランを創造することにある。そのために，大学生を対象にしたワークショップがどのように行われ，その結果，どのようなアイデアがでてきたのかを明らかにする。

学生が提案したプランには，3 つのタイプがあった。ひとつ目は，検温機能を備えた「モニターつき AI」を製作する案である。モニターには，コミュニティの人々を映しだして知りあいを増やしたり，会話をしたりすることなどが企図されている。2 つ目は，スマホ向けの「あいさつアプリ」を開発し，ユーザー同士のマッチングを図るものである。以上の案は，いずれも現代テクノロジーに注目したもので，従来の「あいさつの教育」にはなかったアプローチである。3 つ目は，「高校生のあいさつ運動の活性化」にスポットが当てたプランである。そこでは，とくにあいさつの再社会化の課題を抱える高校生をとりこむために「小学生とともに」をスローガンにあげ，小学生との連携・協働活動が目論まれている。この案は，人と人との関係に関心がある。

キーワード：あいさつの教育，ワークショップ，新型コロナウイルス，学校の新しい生活様式

Ⅰ.「あいさつの教育」の課題～この四半世紀をふりかえって

「あいさつの教育」は，家庭では「しつけ」として，幼稚園や保育所，幼保連携型認定こども園では「言葉の教育」として，小学校・中学校・高等学校では「礼儀の教育」としてなされてきている。

しかし，ここ四半世紀の間，さまざまな角度からあいさつをしない子どもの登場が注目を浴びたり，「あいさつの教育」の意義が問われたりしてきた。こうした状況を受け，今や大学でも「あいさつの教育」が必要とされるようになり，「マナー教育」が提供されるようになってきた。

一般的にあいさつは，社会化の第一段階として小学校の低学年や中学年のころまでは，まわりの人に教えられることで習慣として実践できるようになっていく。高学年になって思春期を迎えると，自意識が目覚め，声をだす恥ずかしさなどから自分からはあいさつしようとしなくなる人がでてくる。その後，社会化の第二段階として，この問題を自分なりに払拭し，改めて自分の力で再社会化を進めていく。しかし，このプロセスがすんなり進むというわけではない。それぞれの段階で，あいさつができるようになる人とそうでない人がでてくる。

1. 社会化の第一段階の問題の複雑化

1）あいさつ運動の広がり～「家庭や地域の教育力の再生」を目指して

第一段階の社会化が進むかどうかは，家庭や地域の教育力にかかっている。だが，家庭や地域の教育力の低下が叫ばれて久しい。

そこで，あいさつ運動にスポットが当たった。平成 8（1996）年の中央教育審議会答申「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）」では，とりわけ地域社会の教育力の低下が指摘されるなか，その再生を促すことが極めて重要になってきていることから，あいさつ運動は地域の大人たちが率先してとりくむべき活動としておおいに奨励された。

2）あいさつ運動へのまなざしの変化

①「子どもの安全」の確保への期待

2000 年代半ばになると，児童が登下校中に犯罪に巻きこまれる事件が多発した。これを受け，あいさつ運動は，地域の見守り活動と連動しながら「子どもの安全」を確保するのに資するものと捉えられるようになっていく。その際，防犯上の理由から「知らない人にはあいさつをしないように，また知らない人にあいさつされたら逃げるように」と指導するとりくみが行われるようになった。

ところが，このとりくみはあいさつ運動に影を落とすようになる。子どもの見守り活動の一環としてあいさつ運動をしている現場からは，「子どもにあいさつしたら無視された」とか「逃げられた」，さらには「不審者扱いされた」などの声があがり，「活動がやりにくいし，そんなことをいわれると気分も悪い」となり，いきおい「あいさつ運動や見守り活動をやめよう」という話がでるようになった。しかし，「こうした風潮は，やはり防犯上どうか」という意見もでて，運動のマンネリ化が危惧されつつも，この話は下火になっていく。

②問われる「あいさつの意義や意味」

2010 年代後半になると，2 つの出来事が人々の耳目を集めた。ひとつ目は兵庫県の話で，ある新聞に掲載された投書がきっかけとなった[1)]。平成 28（2016）年にあるマンションの住民総会で，小学生の子どもをもつ親が「（子どもに）知らない人にあいさつされたら逃げるように教えているので，マンション内ではあいさつをしないように決めてください」と発言し，最終的にあいさつ禁止が決定されたという。「あいさつはするもの」という教育の根幹を揺さぶる問題だけに，投書への反響は大きかった。ここでは，あいさつの根本問題である「あいさつの意義や意味」が問われることになった。

③問われた「地域の教育力の信頼性」

2 つ目は，平成 29（2017）年に千葉県松戸市で起きた小 3 女児殺害事件である。あいさつ運動は，子どもの安全を守るため，地域の見守り活動と連動する活動となることが少なくないが，その見守り活動をほぼ毎日していた人が容疑者として逮捕された。このケースでは，地域の教育力の信頼性に疑念がはさまれることになった。

3）従来の「あいさつの教育」が通用しない子どもたちの出現

近年，こうした動きとは別に，幼少期にいくらまわりの大人たちがやってみせ，いってきかせても，させてみて，ほめてみても，なかなかあいさつができない子どもが増えつつあるといわれ，新たな関心を呼ぶようになった。そうした子は，まわりの様子を感知できなくて「あいさつ」という概念を確立しそこねていたり，人の動きや表情の細かいところに目がいきすぎてあいさつのきっかけがつかめず苦手になったりしている。このため，あいさつができるようになるには，日々の生活のなかやあいさつ運動などで習慣化を促すだけでは不十分で，早期発見と早期対応により身近な人が根気よくかかわっていく必要があるといわれている。だが，実態把握すらまだまだで，「あいさつのしつけ」方法の確立も今後の課題となっている。

2. 思春期以降の再社会化問題の複雑化

1）返礼の保証問題

社会化の第二段階である思春期以降の再社会化も，新たな問題を抱えるようになった。それは，私があいさつにおける「返礼の保証問題」と呼んでいる問題である。2000 年代に入り，自尊感情の低さやいじめの影が一段と色濃くなり，自分からあいさつしたときに相手にシカトされて返事がかえってこないことを恐れる人が増えてきた。彼らがよく口にする言葉に「私，人見知りです」とか「私，コミュ障です」がある。これは自分なりの「リスク管理」で，あらかじめあいさつを自分からしなくてもいいように言い訳することで，相手からのあいさつを促す方略ということができる。結果として，あいさつするかどうかを決定する主導権は，相手が握ることになる。それでも，相手からあいさつをされておかえしのあいさつができれば，なんとか人間関係が保てる。しかし，たとえあいさつされたとしても自分にされたのかの確信がもてなかったり，一瞬どう返事するか迷ったりしているうちに，あいさつをかえすタイミングを逃すことになっていく。さらに，だれからもあいさつされたりしなければ，孤立を深めていくだけになる。

2）基礎的・汎用的能力の育成問題

こうなると，将来社会人としてやっていくのが厳しくなってしまうことにもなりかねない。その場のリスク管理をうまくしたつもりが，将来に向けてより大きなリスクを抱えこんでしまう。

平成 22（2010）年 5 月にだされた中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会第二次審議経過報告『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について』では，「基礎的・汎用的能力」（社会的・職業的自立，社会・職業への円滑な移行に必要な力）として，「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」などをあげている。だが，返礼の保証がなければあいさつをしない，あいさつができないというのであれば，この能力の育成が危うくなる。

3）相手への視線回避問題

あいさつの再社会化が必要となるのは，思春期特有の問題もある。あいさつするときに自分から目をあわせたり声をだしたりするのが恥ずかしいというのは，その典型である。どうしたらいいかというと，そもそもあいさつをする状況にならないように，人と視線をあわさなければいい。これで，あいさつをするしないや返礼の保証などの問題が回避できる。

この状況を後押しするのがスマホである。「歩きスマホ」でもしていれば，自分が意識するしないにかかわらず，相手の目をみてあいさつする状況にないことをアピールできる。だが，そのうち，目の前にいる人とも「ながらスマホ」をするようになり，人と目をあわせて会話する力も衰え，基礎的・汎用的能力を伸ばす機会も失っていく。

Ⅱ.「あいさつの教育」の現代的課題～コロナ禍への対応

令和 2 年（2020）年春，私たちの日常生活に大きな変化が起きた。それは，新型コロナウイルスの世界的大流行である。2 月 27 日には，感染症の拡大抑制の目的で全国一斉の小中高の臨時休校が要請され，3 月 2 日の週か

らほぼ一斉に臨時休校となり，あいさつ運動どころではなくなった。

その後も国内の感染者数は増え続け，4月7日には7都府県で緊急事態宣言が発令された。11日には第1波の全国の新規感染者数のピークを迎え，16日にはついに全国一律の緊急事態宣言がだされた。

5月4日になると，新型コロナウイルス感染症対策専門会議が感染対策として「新しい生活様式」を示し，「人が集まってはいけない。話してはいけない。ふれあってはいけない」ということになり，ソーシャルディスタンスを確保することやマスクを着用することが求められるようになった。

6月に入って，各地で学校が再開された。それにともない，文部科学省は，16日付けで「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生マニュアル」（改訂版）を公表した。これは，学校の衛生管理に関する具体的な事項をまとめたもので，「学校の新しい生活様式」というサブタイトルがつけられている。冒頭には，「私たちは，長期間，この新たな感染症とともに社会で生きていかなければなりません」とあり，「3密（密閉，密集，密接）の回避」やマスク着用，手洗いの励行の徹底を呼びかけ，学校の役割として「新しい生活様式」の実践を求めた。そのためには，「児童生徒等への指導のみならず，朝の検温や共用物品の消毒に加え，給食時間や休み時間，登下校時の児童生徒等の行動の見守りなど，地域のボランティア等の協力を得ながら学校全体として取り組む必要があります」と述べている。

1.「学校の新たな生活様式」の影響

1）マスクの壁問題

マスクの着用は，あいさつにも影響を及ぼしていく。まず，笑顔であいさつすることがままならなくなっていく。顔で一番表現力があるのは口元だが，「マスクの壁」が登場し，それが封じられてしまった。その代わりに期待されるのは目力だが，それを発揮しようにもソーシャルディスタンスがその効果を減じてしまう。

笑顔でのあいさつは，とりたてて声をださなくてもよかったが，マスクが邪魔することからくる表情の不足を声で補おうにも，相手との距離を埋めるために大声をだすことは憚られた。そのために大きく息をするのも大変で，距離をとっての声かけはしづらかった。

2）肥大化する心理的な壁問題

笑顔でのあいさつどころか声をだすことが苦手な人は，3密回避によって新たに目力が求められたり，今まで以上に口を開いて声を発したりしないと相手に伝わらない状況となり，あいさつへの意欲をますます失っていった。いきおい「無理，面倒，しんどい」となって，あいさつをすることを諦めてしまうようになった。

2. 新たなあいさつ法の誕生か，一時的現象か，お国柄か

1）あいさつの確認問題

ハナ・ケントリッジ[2)]によると，イギリスではコロナ前，若い人たちはよくあいさつでハグをしていたが，政府がロックダウン中は制限を呼びかけたことで，ハグする前に「ハグしますか」と相手に聞くなどいろいろ確認するようになり，さらにあいさつを交わしたあとに続く話題はもっぱらコロナについてとなったという。

日本でも，コロナ前，女子学生の間ではハグする風景がよくみられていた。だが，事前に相手にハグの許可を求める状況が生まれているかは，今のところ定かではない。ただ，日本では，身体的接触は控えられるので，表立った動きは少ないのではないだろうか。今後の動向を注視したい。

2）あいさつの配慮問題

またイギリスでは，令和3（2021）年7月現在の話として，ひじでお互いにタッチしあう「ひじタッチ」がはやっているという。これは，国際会議でもよく目にするようになった。このような変化は，ケントリッジも指摘するように，コロナ禍を経験したことで人づきあいでの思いやりが生まれ，他者のコロナに対する考え方や信じ方を尊重する態度が求められるようになったからだろう。

このひじタッチは，日本でも散見されるようになった。これまでは「グータッチ」がみられていたが，直接皮膚がふれあうことが嫌われたのだろう。とはいえグータッチは，たとえば令和3年（2021）年9月に実施された

自由民主党総裁選挙では，ワクチン担当相をはじめとする議員たちがよくやっていたように，まったくなくなったわけではない。

要は，あいさつの確認や配慮のような作法にかかわることは変化するものの，あいさつの必要性は変わらないということだろう。あいさつの仕方にも，状況とともに不易と流行があることがみてとれる。

Ⅲ．研究目的と方法

ところで，地域と学校が連携・協働して行ってきたあいさつ運動は，マンネリ化して成功例が少ないという話がある。こうした受けとめ方がある一方で，マンネリこそが大事だろうと運動を連綿と続けているところもある。

令和 3（2021）年 3 月 29 日に新型コロナ感染で亡くなった志村けんは，エッセイ集『変なおじさん』（日経 BP 社，1998）のなかで，笑いの話としてだが，「マンネリは宝であり，マンネリになるまでやり続けられると言うことは実は凄いことだ」と述べ，同じことをやり続ける積み重ねが大事だと指摘している。

たとえマンネリ化していたとしても，あいさつをすることのメリットは少なくない。たとえば，濱本伸彦が行った調査によると，地域の人（家族や先生以外の大人）とあいさつをする関係のある児童生徒ほど社会参加・適応の項目に対する回答がポジティブになる傾向にあるという[3)]。こうしたメリットがあることを思えば，コロナ禍で新たな生活様式が模索されるなか，あいさつ運動をはじめとする「あいさつの教育」も新たなやり方を見出すことができるなら，指摘されるようなマンネリからの脱出機会となる可能性もある。

コロナ下でのあいさつ運動は，死に体となって衰退していくのか，それともマンネリからの脱出機会となるのか，はたまたマンネリの大切さ（真の意味）を再認識させることになるのか。このご時世にあいさつ運動をどのように展開していったらいいのか，本当に悩みどころである。

本論は，こうした問題意識を受け，コロナ下でのあいさつ運動をどうしていったらいいのか，その方途を探ることを目的としている。

そこで，この問題に向きあうために，教職志望の学生たちを対象に「コロナ下におけるあいさつの教育」の企画をたててもらうワークショップ（WS）を実施した。その活動を通して，ウィズコロナの時代において学校を核とした地域づくりや地域とともにある学校づくりの一環として，あいさつ運動を地域と学校が連携・協働しながらどう展開していったらいいのか，その際に近年社会教育の場でよく耳にする「楽しさなくして参加なし」の視点をふまえて，あいさつ運動を活性化する方途について，自分たちの意見や考えをまとめてもらうことにした。なお，地域と連携する学校段階や学校間の連携は，各自で自由に設定してよいことにした。

Ⅳ．WS の流れ

WS は，島根県立大学で令和 2 年（2020）年度の前期夏季集中講義として 8 月 4 日から 4 日間開講した，教職科目である「教育方法論」を受講した 3 年生 10 名を対象に実施した。時期としては，全国的には新規感染者数が第 2 波のピークを迎えていたが，島根県ではまだ目立ってはいなかったころのことである。

集中講義の初日は，WS の趣旨説明をするとともに，3 日目の WS 開催に向けて準備を進めるよう指示した。その際，テーマに係る資料を共有するために，これまでに実施した小中高生向けの「あいさつの教育企画」を立案する試みをまとめた島田論文 2 本[4)5)]と，小高連携でのあいさつ運動を紹介する新聞記事[6)]と，ごみ拾いを競技として楽しんでいる様子を伝える新聞記事[7)]を配布し，事前チェックを促した。

3 日目の WS では，3 チーム（3 人が 2 組，4 人が 1 組）にわかれて熟議をし，グループ案をまとめて発表してもらった。それを受け，各自がさらに自分なりに洗練させたり，それ以外にいいアイデアがあるなら新たな案を作成したりして，最終的には企画名をつけ，さらに熟議の感想を加えた上でレポートにまとめて，4 日目の集中講義終了後に提出してもらう旨を話した。その際，レポートを本研究の資料として提供できるかについて尋ね，提供は本人の自由であること，提供しないことでいかなる不利益も被らないこと，資料はすべて匿名扱いになることを説明し，提供への同意を得た人のもののみを利用することにした。その結果，全員から同意を得た。

Ⅴ．企画案の実際

WS の発表では，どんな案がでてきたのだろうか。最初のグループは，検温機能のある「モニターつき AI」の製作を企図していた。2 つ目グループは，スマホ向けの「あいさつアプリ」を開発して活用していく方向性を探っていた。最後のグループは，高校生のあいさつ運動の活性化を目指していた。具体的には，できるだけ声だしではなくジェスチャーを通して心を通わせる方法をメインにすることで，あいさつの再社会化の問題を抱えている高校生を，いかに地域と学校の連携・協働活動としてのあいさつ運動に参加させるかについて案が練られていた。その際，「小学生とともに」をスローガンにあげ，小学生と高校生の交流を通して地域の安心安全を実現し，温かな地域社会をつくっていくことに関心が向けられていた。

ところで，最終的にレポートとして提出された個人案は，グループ案では見送られて廃案となったものがいくつか復活してきていた。だが，自分ひとりの力でアイデアをまとめるには，時間が足りなかったようである。コロナ下の活動を考えるのが精いっぱいで，その上であいさつ運動や地域との連携につなげるところまではなかなかいっていなかった。

以下では，指定されたレポートの内容の要件を満たした 6 つの個人案について，発表グループ別に「企画名」と「対象となる学校段階」と「企画案」について簡潔に紹介する。このため，レポートは文脈を乱さない範囲で編集をしている。

1.「モニターつき AI」の製作案をだしたグループ

ひとつ目は，検温機能のある「モニターつき AI」の製作を企図したグループで，3 名中 2 名の案をとりあげる。

◎企画名「コロナとの共存を AI とよりよく」〔小中高生対象〕

小学校に「モニターつきの AI」を導入して，小学生からあいさつの習慣化を進めたい。まず，AI を小学校の昇降口などに設置し，その AI に児童があいさつすると検温システムが起動し，体温を表示する。モニターには，週に 2 日ほど地域の人に登場してもらい，モニター越しにビデオ通話をすることで児童と地域の方との接点をつくり，校外でその人をみたときに小学生が自分からあいさつをする流れをつくる。登場する地域の人は，毎月学校側が応募と選考を行い，児童の安全を保障する。そこからあいさつの輪は広がり，その地域であいさつを当たり前のようにできる中高生を育成していく。地域に適度にあいさつの輪が広まったところで，小学生と高校生を主体にその地域特有のあいさつの仕方をつくり，グランプリを競いあうコンテストを行い，地域と子どもの一体化を図っていく。

◎企画名「未来志向あいさつ」〔小学生対象〕

あいさつの習慣は，幼いときから習慣的に行うことで身につくが，小学生なら地域の人とも気軽にあいさつできるようになっているだろう。加えて小学生は好奇心旺盛で，新しいことにもあまり距離をつくらずに活動できる。そこで，児童対象の「AI ロボット」を開発したい。児童がロボットに向かって元気よくあいさつを行うことで児童の元気度を数値化すると同時に，サーモグラフィを用いて児童の体温を測って表示させることで，これで効率よくあいさつと検温ができ，教師の働きすぎの問題も解決できる。さらに，ロボットには画面がついていて，地域の人の顔を映して見慣れてもらい，対ロボットだけでなく地域の人たちともあいさつをしている感覚を養い，実際に地域で会ったときに「この人は地域の人なんだ。あいさつしてみよう」という気持ちがでてきて，対面型でもあいさつを行うことができるようになるだろう。

2.「あいさつアプリ」の開発案をだしたグループ

2 つ目は，スマホ向けの「あいさつアプリ」の開発を目指したグループで，3 名中 1 名の案を紹介する。

◎企画名「アプリによってあいさつを活性化！！」〔中高生対象〕

スマホのアプリを通して，対面であいさつをする方法を提案したい。アプリは，ZOOM や Teams に似通ったもので，学校が管理し，学校が登録許可した地域の人や生徒，保護者のみが使用できるようにし，防犯を徹底する。仕様は，位置情報システムを利用することでソーシャルディスタンスの保てる距離（5 m 以上 50 m 以内ぐらい）にいる人に通知が届いたあと，位置関係をアプリ上に表示し，30 分間のみマッチングできるが交通安全に対応するため，自転車や車など一定のスピード以上で動いている場合，通知は届かないようにする。マッチングは，お互いがアプリを開けている場合のみ可能で，登録していた「あいさつボイス」（方言や好きな言葉）がスマホから発せられるようにする。マッチング後は，ビデオ会話を行うことで相手の表情がわかるようにする。また，各自にキャラ（みんなが親しみやすいポケモン的なもの）を用意し，アプリを飽きずに使ってもらえるようにする。さらに利用を促すためにポイント制を導入し，あいさつをした相手（キャラのレベル）によってポイント（経験値）を変えたり，あいさつに続いて会話が続いた場合はさらにポイントを加えたりして，獲得したポイントと図書カードや商品などと交換できるようにすることで生徒のやる気をあげ，自ら率先して積極的にあいさつができるようにする。

3. 高校生のあいさつ運動の活性化案をだしたグループ

3 つ目は，高校生のあいさつ運動の活性化を図ろうとするグループである。なお，個人案では，かなり独自色がでていた。ここでは，4 名中 3 名の案を紹介する。

◎企画名「小学生がつなぐ地域の輪～心通わせるあいさつ運動」〔小高生対象〕

だれもが安心してあいさつをできるような温かい町をつくることが，高校生のあいさつに対する意識変化をもたらすのではないか。そのための第一ステップは，小学生を対象としたあいさつ運動である。まずは，あいさつ運動をアピールするためのグッズづくりである。図工の時間などを使ってあいさつを促すような絵やキャッチフレーズなどをタスキに書き，地域の方が朝のあいさつ運動や散歩をする際にはそれをつけてもらう。これで，小学生が地域の人に対してもつ不信感や不安を軽減し，お互いが安心して声かけあえる環境をつくっていく。また，子どもたちがなにかを達成したときに徐々に自信がつくような仕掛けとして，スタンプラリーなどを用いて一定数のスタンプがたまった場合，花の苗や種をプレゼントし，自分たちの努力が目に見える形で残るようにする。第二ステップは高校生を対象にするものだが，きっとあいさつをされたらかえすが自分からはしないという生徒がほとんどだろう。そこで，小学校のあいさつ運動にのっかかる形で，小高連携活動をしたい。高校で定期的に行っている朝のあいさつ運動に小学生を招き，先生や生徒会メンバーらとともに校門でのあいさつの言葉かけに参加してもらう。高校生は小学生には笑顔であいさつをかえしやすいだろうし，ついでになにかお話もできるかもしれない。その際，ウィズコロナの時代でマスクをしていると表情がわかりづらく声も伝わりにくいので，主として自分から会釈をしていく活動を推進していきたい。

◎企画名「小学生のあいさつスタンプラリー＆高校生のあいさつ運動 with 小学生」〔小高生対象〕

まず小学校で，3 密防止の観点からあいさつ運動の一環として「あいさつでスタンプラリー」を実施する。小学生は，通学路の各所にたっている保護者や地域の方にあいさつをして，それがちゃんとできるとその場で手にスタンプを押してもらい，学校に着くまでスタンプをたくさん集めていく。感染拡大防止には手洗いやうがいが有効といわれているが，この企画では児童が登校後に手のスタンプを洗うために自然と手洗いをする環境を用意できる。次に，高校生は近隣の小学校に出向いて，その活動に参加する。高校生は異なる年代の人にあいさつをする経験を積むことであいさつへの意識を高めるとともに，高校生には小学生のお手本になろうという気持ちをもってもらうことにある。

◎企画名「小学生から発信するあいさつ運動」〔小中高生対象〕

まず，一番あいさつ運動の影響を受けやすい小学生を対象にあいさつ運動をはじめ，校外で教員や地域の登下校のボランティア活動をしている方から声かけをしてもらう。その際，ソーシャルディスタンスを保ちつつ，従来のような大きな声ではなく，会釈や手をふる，アイコンタクトをするなど体で表現するあいさつ方法を重視し，

声だしが恥ずかしかったり緊張したりしてできない児童生徒の参加を促進する。続いて，地域で学期中に毎月あいさつ週間を設定し，小中高同時に朝のあいさつ運動を実施する。そのとき，原則として立候補制で募集した高校生が，自校生だけでなく高校前を通って登校する小中学生などにあいさつをしたり，近くの小中学校に出向いて児童生徒といっしょにあいさつ運動を行ったりする。これで小中高生の交流ができ，お互いになにげなく日常のあいさつができるようになっていく。高校では，これらの活動を撮影し総合的学習などで視聴し，日常のあいさつを促していく。

Ⅵ．おわりに～まとめに代えて

コロナ下において，学校においても 3 密の回避やマスクの着用，手洗いの励行など「新しい生活様式」の徹底が求められるようになった。その実践のためには，教師による児童生徒等への指導だけではなく，地域のボランティアなどの協力を得ながら学校全体としてとりくんでいく必要がある。

とはいえ，「人が集まってはいけない。話してはいけない。ふれあってはいけない」となると，地域と学校との連携・協働活動にさまざまな制約が生まれてくる。

「あいさつの教育」も例外ではない。これまであいさつ運動では，人が集まり，声をかけあい，会話をしたり，ハイタッチをしたりするなど，ふれあうことで活動が推進されてきた。これらのことが制限された今，「あいさつの教育」をどのように展開していったらいいのだろうか。

一般に「笑顔であいさつ」はあいさつの基本中の基本だが，学校レベルでは「目をみて，元気よく声をだして，笑顔であいさつ」となる。このため，「目をみる」「声をだす」「笑顔」の各要素をコロナ下という状況にどうフィットさせていくかが問われている。加えて，「マスクの壁」や「肥大化する心理的な壁」などの問題をどう乗りこえて，「学校の新しい生活様式」にどう落としこんでいったらいいのかを考える必要がある。

学生が最終的に提出した個人案は，3 つのタイプにわかれた。ひとつ目は，検温機能のある「モニターつき AI」を製作する案である。そこでは，それをロボットにくみこむアイデアも披露されていた。これは，AI 技術が発展してきた今の時代であるからこそ可能なプランである。

2 つ目は，現在の日本ではスマホの所有率が 60% をこえ，さらにそこで使えるさまざまなアプリが提供されていることをふまえ，「あいさつアプリ」を開発し，それをあいさつ運動に活用する案である。

以上の案は，現代テクノロジーの活用を模索するものである。これらは，従来のあいさつ運動にはまったくみられない発想で，コロナ下だからこそでてきたアイデアといえる。あいさつ運動の惰性化が危惧され，活性化が求められる動きもあるなか，これらの案はコロナを転機や好機と捉えて新たなアプローチを提供し，地域の未来を子どもたちに託そうとしている。

3 つ目は，あいさつの再社会化の課題を抱える高校生を視野に収めて，小中高生が連携・協働するあいさつ運動のあり方を模索する案である。高校生に期待されているのは，年下の子どもたちに対するお兄ちゃん・お姉ちゃんとしてのリード役で，比較的あいさつが自然にできる小学生相手に役にハマることで，肥大化した心理的な壁などをとり壊していくことが目指されている。この案は，人と人との関係に関心がある。

今回は，コロナ禍を受け，WS を通して新たな「あいさつの教育」のあり方とその実現可能性を探った。今後も，社会化の対象者や担い手，環境条件などを変えたりしながら試みを続けていきたい。

注

1）「◆理解に苦しんでます」『神戸新聞』2016 年 11 月 4 日夕刊
2）ハナ・ケントリッジ「コロナでマナー変わる？　ハグする？　生まれた配慮」『朝日新聞』2021 年 7 月 14 日
3）濱本伸彦「子どもの成長を支える「地域の教育力」とは―子どもと地域の大人のつながりがもつ教育効果の分析」原清治・山内乾史編『教育社会学』ミネルヴァ書房，2019
4）島田博司「高校生向けの「あいさつの教育」を立案するワークショップ」『甲南女子大学研究紀要Ⅰ』第 55 号，2019
5）島田博司「「あいさつの教育」を立案するワークショップ―「小高連携」の観点から学校を核とした地域づくりを目指して」『甲南女子大学研究紀要Ⅰ』第 56 号，2020
6）「いま子どもたちは No.1593　朝のあいさつ　考え学び深める」『朝日新聞』2019 年 6 月 24 日
7）「ECO 活プラス　競え！スポーツごみ拾い」『朝日新聞』2019 年 1 月 15 日夕刊